

A-110 食品の嗜好に関する研究第7報 各種対象群における食品嗜好の特性と傾向  
菅廣大谷短大生活科学 山下昭・梅原羽衣子・池添博彦

目的 食品の嗜好に対し影響を与える因子は種々あり、年齢、性、体格、健康度合、性格、職業、兄弟の数、生活環境、地理的条件等が考えられる。今回は個々の対象群における食品嗜好の特性と傾向を分析した。

方法 Hedonic Scale Value (HSV) を用い、個々の群における平均値と標準偏差を算出した。又 Food Preference Index とし Well-Liked Food Preference Index (LFI) と Disliked Food Preference Index (DFI) を算出し、各々の群における嗜好の特性を解析した。

結果 男女共に年齢の若い群の方が好、嫌食品の割合は大きく、好きな食品の割合は女性30才以下で HSV 1.0 のもの 19.2, 31才以上で 10.6, HSV 9.0 では夫々 4.4 と 2.9 である。男性では 30才以下 HSV 1.0 で 18.9, 31才以上で 7.5, HSV 9.0 では夫々 2.9 と 0.8 である。LFI, DFI をみても、30才以下は 31才以上に比べて大きく、LFI で各々 92.3 と 52.5, DFI で 130.3 と 96.5 である。親子の間での嗜好については親で魚、野菜が好まれ、子では肉、卵、乳、菓子 が好まれる。食べた事のない食品の数も、年齢の若い群ほど多く、女性 A で 10.2, D で 1.9, 男性 A で 10.2, D で 3.2 とかなり大きく異なっている。